Feel in’Alone

朝比奈　龍希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｅｅｌｉｎ，Ａｌｏｎｅ

【Ｎコード】
Ｎ５６１１Ｓ

【作者名】
朝比奈　龍希

【あらすじ】
光月海と火鷹忍の高校２年の秋のお話。
サブタイは海君の受難です。（笑）

秋の風

秋の風が辺りに吹き始めてきた頃……。
世間では食欲の秋だとか、実りの秋とか言っているが彼、光月海にとって、去年までがその食欲の秋一色だった。

しかし。
今年の、高校2年生の秋は違っていた。
前世からの婚約者で、今も恋人の『彼』火鷹忍に関する事件で、海は受難の秋を迎える事となってしまったのである。

サラサラの金髪と、綺麗なサファイアの瞳がケラケラと笑う。
一見すると、可愛いともカッコイイとも見える少年であった。
確かに見た目では美少年なのだが、実際は性格と口の悪さが反比例していたりするのであった。
彼の名は光月海。
ここ白皇学園高等部2－Cの教室で、海と仲良しの藤波亨の二人が、夕焼けを観ながら何やら話をしていた。
「……で。あやつとは進展したんかー？」
窓を全開に開け放ち、机に上に座り秋風を受けながら、亨が海に向けて言った。
亨の天然茶髪が太陽の光で色を増す。
髪から覗く、胡桃色の瞳が能天気に笑う。
海にとって亨は、中等部の頃からの付き合いで親友でもあり、隠し事をしていない人物の一人でもある。
海は亨の台詞に怪訝そうに眉を寄せる。
「し、進展ってなんだよ？」

「決まってるじゃねーか！　某生徒会長様とは上手くいってんのかよ？」
「……う、うるせえなぁ……そんなんどーだっていいだろ！　そりゃあ、亨には色々世話になってるけど……」
ぶっきらぼうに海はそう言う。
事実、海と忍がちゃんとした『恋人』になる切っ掛けと言うか、海がその一歩を踏み出そうか否か、悩んでいたのを亨がトンと背中を押したのである。
ある意味で、海は親友に弱みを握られてしまったのも過言ではない。
「へぇー。海君、俺に隠し事なんて無意味だぞ？」
ニヤニヤほくそ笑む亨を、嫌そうに海が見詰める。
気が合いすぎて、亨に隠し事をしても直ぐにバレる。考えてる事が何となくお互い判ってしまうからだ。
「べっ……別に隠してるワケじゃねえけど……さ」
「ははーん。なあーんだ！　海ってば照れてんのか？」
口ごもる海に亨はニヤニヤ笑いながら、核心を突いてくる。
そうなのだ。
例え親友と言えど、流石に言い辛い。
でも。
どうせ、言わなくたってバレバレなのは必至である。ただ、面と向かって言うのに抵抗があるからだ。
「うるせえよ！　解かってんなら、一々訊かなくたっていいだろっ！」
海はそっぽを向いて不貞腐れる。意地悪な親友に、自分が照れてしまっているのを見られたく無くて。
「だってさあ。一応、海の親友の俺としては、ハッパかけておきながら無視ってのも何だしよ……それに、お前が幸せになんなきゃ俺もなんか後味悪いしな」
「まあ……一理あるわな」

「だろ？」
亨の言う事はごもっともで、煽っておきながらダメでした。なんて洒落にもならない状況だからである。
ましてや男同士なんてのは……。
「でも……まあ、何とかおさまった事に変わりないんだし、俺としてはお前らの事応援してやるよ」
「応援って……亨、お前自分が言ってる事解かって言ってるんだろうな？　よもや無責任に何て冗談じゃないぞ」
「解かってるって！　前世からの因縁……もとい、約束された恋。これが、どういう事なんてちゃーんと理解してるって」
（本当かよ？）
そんな風に言う亨に、一抹の不安を感じずにはいられない海だった。
「まっ、幸か不幸か両方とも男に生れちまったのは運命の悪戯ってトコだろ？　でも、女で生れたからって、それが絶対幸せって事はないし……あのさ、当たり前なんだろうけどこれって、忍ぶ恋なんだよな」
茶化しながら言っていた亨だが、少し心配そうに言葉を紡ぎ始めた。
「ああ……」
「海が本当の事言ったって誰も信じちゃくれねえし、そういうのって結構辛いと思うんだけど、辛かったら俺、いつでも相談にものるし、頼りにしろよ、なっ！」
いつもの調子に戻って亨は、海に笑いかけた。
「もちろん、頼りにしてるぜ」
亨の笑みにつられて海も笑う。
「よっと……」
海がひょいっと机から降りる。
「じゃ、俺。そろそろあいつのトコ行くわ」
「おーおー。ラブラブなことで」

「なっ、何だよ。そのラブラブってのは！」
反論する様に海は、亨に向かって吠える。
「その言葉の通りだよ。お前らの事に口出しは、無用ってみたいだな」
「言っておくがなぁ！　俺はあいつが来いって言うから仕方なく行くんだからなッッ！！」
びしっ！！　と、指差して言う海を頷きつつ亨は言う。
「はい、はい。解かってますって。ほら、さっさと火鷹んトコ行けよ」
「あ～～っっ！　お前、俺の事信じてねえなあッッ！！」
含み笑いをしつつ言った亨に、海は怒った様に文句を言う。
「信じてるって！　俺は十分に海の事を理解してるぜ。天邪鬼な光月海君」
「！！！」
海は物凄くギョッ！　と、した顔で亨を見た。
「ほら、行った行った！　遅刻すると火鷹の奴がうるせえんじゃねえのか？」
追い払う様にヒラヒラと手を振って、亨が海に笑って言う。
「えッ！？」
海はハッとなって腕時計を見る。
「げっ、ヤバイ……」
時刻を確認して、少し青ざめる。
「海っ！」
「わっ！？」
亨がぽんと、海の鞄を投げる。海はびっくりしながら、それをキャッチする。
「サンキュ亨」
「じゃあな」
海はウインクして、教室から駆け出して行くのだった。
一人ぽつんと教室に残された亨は、海が教室から消えるのを確認

してから、視線を窓の外へと移す。
「ほーんと。知らぬは本人達なりってか。火鷹の影響力は本当強いね。海の奴自分の性格が丸くなりつつあるの気付いてねえし。まあいいか、海は海だしな。俺は応援するだけしか出来ねえけど……」
クスクス笑みを零しながら、亨は艶やかに染まる夕陽を眺めるのだった――――――。

生徒会長室の秘め事（前書き）

らぶえっちぃシーンが御座いますので、苦手な方がUターンして下さいませ。

生徒会長室の秘め事

「わりい！　遅くなったッ！」

生徒会会長室のドアを勢い良く開けて、海が中へ飛び込んで来る。

中央に向かい合ったソファーの間にテーブルが置かれ、その先に会長専用の机が一つある。さながら雰囲気的に社長室風に見えなくもない。

まあ、名門私立学園で、お嬢様、お坊ちゃんの学校だから、その有り余った寄付金等で有意義に使ったとか。その一つに、生徒会室&会長室がある。

ここは、冷暖房完備で挙句の果てには、防音完備と言う徹底振りである。

とはいえ、海も十二分にお坊ちゃんの家柄だったりするのだけれど……。

ちなみに前世ではお姫様だったりする。名前は、シアーナ・リュース・ティア。

そしてそのお姫様の恋人は王子様で、ラリス・リュー・ティアナと言う。

今は火鷹忍と言う人物である。

彼の人は会長の椅子に座り何やら、ファイルに目を通している。

彼の背から差し込む窓の夕日を、薄目のカーテンが遮断していた。

室内に入ってきた海をチラリと見遣り、パタンとおもむろにファイルを閉じた。

その一つ一つの仕草は、何とも言い難い優雅さであるが、それもさることながら、彼の持って生れた　その類い稀なる美貌は、恐いくらい冷たいものであった。

しかし。

彼は……たった一人だけに、とても優しい表情を見せる。

その特権を持つのが、他ならぬ海なのである。

鞄をテーブルの上に、無造作に置く海を見て忍が言った。
「遅いぞ。何やっていたんだ？」
冷たく言うわりには、セピア色の瞳は穏やかである。
「だからぁー。悪かったよ」
素直に海は自分の非を認める。
「ま。すっぽかした訳じゃないから、許してやる」
「なーんか、イヤな言い方だなぁ……それってさ」
忍の遠回しな言い方に、眉を寄せて海はぼやき、ソファーの縁に座る。
「んで。話したい事ってなんだよ？」
海は気を取り直して、忍に問い掛ける。
「……」
「？」
少し黙り込む忍を、不思議そうに海が見詰める。
「どうかしたの？」
「いや、何でもない」
首を小さく振って、忍は椅子から立ち上がり海の所へと歩み寄る。
「気になるなー」
顔を上げて買いは、麗しの人を見詰める。
「気にするな」
忍はふっ……と笑って、右手を海の頬へと伸ばす。
「気にするって……」
「黙ってろ」
忍はそう言うと、強引に海の口唇を塞ぐ。
釈然としないながらも、海は忍の口付けを受ける。
暫くして、強引な忍から解放される。
「忍……？」
不思議に思いつつ、じっと忍の顔を見上げてみると。
ニヤリ。
何を思いついたのか忍は、楽しそうな悪魔の笑みを浮かべた。

（や……ヤバイ！）
そう海は思ったが、既に遅かった。あっという間に、ソファーに押し倒されてしまう。
（冗談じゃねえッ！！）
「ちょ……ちょっと、まてまて待てーッ！」
じたばたして海は暴れる。
いつも面倒臭いとか思って、中途半端にネクタイを締めなかったり外したりしている。
今日は今日で、少し暖かかったからネクタイは鞄の中で、シャツは第二ボタンまで外してあるという始末。これがどういう事か、察しがつかない訳はない。
猫の前に、マタタビや好物のお魚を吊るすようなものだ。
「ざけんなーッ！　こんな場所で誰か来たらどうするんだよッ！！」
ピタッ。
忍の動きが止まる。
「それもそうだな。誰かに邪魔されるのは、気に入らないな」
頷いて忍は海から身体を離し、ネクタイを片手で外しながら、背後の机の上にある煙草の箱より少し薄っぺらい物に指を滑らす。
数秒後、カチャンと金属音がドアの方でする。
「え？　なに今の音？」
「ああ。進入者防止用のだ」
外したネクタイを机に上に置き、忍はにこやかに海に告げた。
ほっとしたのも束の間、顔をひくひく引きつらせて海が口を開く。
「おい……それって、もしや自動ロック！？」
「御名答」
「なんでそんなもんが、ここに有るんだッ！」
「答えは簡単だ。俺が紫苑に言って作らせたんだからな」
悪魔の微笑みを浮かべながら、忍はあっさりと答える。
紫苑とは燕紫苑の事で、この学園一の超天才美女と言う名称が相応しく、海達とはクラスは違うが同じ二年生でありながら、大人び

た美しい容姿を持つ女生徒である。
だがしかし、彼女は自分の欲望には酷く忠実で、金と実験や研究が大好きな性分で、頼み事はそれ相応な金額を積めば、なんでもするというマッドサイエンティストでもあった。
彼女と余裕で張り合えるのは、クラスメイトの桜塚李也と、目の前にいる悪魔……もとい、火鷹忍の二人である。
紫苑にかかれば、セキュリティシステムを作り上げる事も造作もないことであろう。防犯システム用に、レーザー等を搭載させる事も可能だろう。
（やだなーぁ。変な仕掛け造ってねーだろーな……。あ、でも、紫苑の事だ。絶対になんか造ってあるだろーな。きっと……）
逃げ出したい衝動に駆られる海であったが、あまりにも不利な状況でしかも、未知数な仕掛けがある事に考えがいきついてしまって恐くなる。
「どうした海？　黙って？」
涼しそうな表情で忍は、青ざめる海を見下ろす。
「……アクマ」
ぼそっと海が呟くと忍は、フッと笑いを零して海にキスをする。
「誉め言葉として貰っておこう」
（適わないなぁ……忍には）
溜め息を小さく吐き、海は笑みを浮かべて忍の黒髪に手を伸ばし、指を絡める。
セピア色の瞳が、包み込むような優しさで海を受け止める。
海はこういう、彼の優しい瞳を見るのがとても好きなのだ。
そう。
昔に還えったようで……。
「なあ、ラスって呼んでいいか？」
怖々と海は忍に訊く。
縋るような瞳で忍を見詰める海の頬にそっと優しく触れて、忍は穏やかに微笑んだ。

「好きなように呼べよ。今は二人だけなんだからな」
「……」
自分で言っておきながら、海は少し失敗したかなと思う。
でも……誰よりも、海自身が前世を引き摺っているのかもしれない。
それは、引き摺るというよりも、現在進行形であった。
昔のまま……いや、それ以上に目の前の彼に海は恋してる。
――――愛してる。
「忍……」
小さく名を呼ぶ海に、首を振って忍が否定する。
「違うだろ、シアーナ。俺はラリスだ」
その言葉に、ちょっと嬉しそうに海が笑みを零す。
「……ラス？」
「そう、シア、俺はラスだよ。俺はここにいる」
忍は海の口唇にキスをして、愛しそうに微笑む。
「愛してるよ。シア」
「ラスのバカ。なんでいつも、いつも、先に言っちゃうんだよ。俺だって、ラスのことが好きなのに……」
「知ってるよ」
くすっと忍が笑って応える。
「やっぱりラス、昔より意地悪になった」
「そうか？」
「そうだよっ」
忍はぷうと、むくれている海の口唇に自分の口唇を重ね合わせる。
「ん……っ……」
蕩けるような甘いキスに酔わされながら、忍の手によってシャツのボタンを外され、海はその綺麗な肌を露にされる。
口付けを与えながら、細く長い指を海の肌に滑らせる。
ぴくん……と、海の身体が敏感に反応するのを確認すると忍は、キスする対象を変えてゆく。

首筋に、肩に、胸に。
忍は海の胸の突起を、クルクルと円を描く様に指先で遊び始める。
「あ……っ」
海がたまらず声音を上げる。
それを満足そうに見入ってから、忍は指で刺激を与えつつそこへ接吻をする。
「あ！　んっ……」
敏感に反応する海を楽しそうに、口元に笑みを綻ばせながら忍は舌を這わせる。
「……く……ぅ……」
海は忍の背中に手を伸ばして、シャツの衣を掴む。忍はそんな海などお構いなしに、唇と舌をそこかしこに這わせた。
所々に紅の花を咲かせながら……。
「っ……あっ」
頭を振って海は喘ぎ声を漏らす。
「シアーナ、どうして欲しい？」
冷静沈着な口調で忍は海に問い掛ける。
「ん……あっ……」
ビクン！　と海の身体が跳ねる。
熱くなりつつある、自分自身を押さえ込むことが出来なくなってきている海は、言葉にしたくても上手く言えなくて、かぶりを何度か振って忍に応える。
忍の左手がゆっくりと下へと滑ってゆく。そして、布の下で昂まりつつある海のソレに、やんわりと忍は触れる。
「――言えないよな。もうこんなになってるなんてさ」
忍の口調はあくまで冷静なのに、何故か楽しそうに聞こえる。その声を聞きながらも、海は絶え間無く与えられる愛撫に、身体は素直に反応してゆく。
「んぁ……っ……ラスぅ……」
じれったい愛撫が海を狂わす。

甘い声を上げて海は、彼の名を口にする。
忍は手を休めて、スッと身体をずらし海に口付けを与える。
切ないくらい優しいキス。
「ラス……」
目の前の麗しい恋人は時々、優しい優しい微笑をくれる。
それだけで海は嬉しかった。
その笑みが、海にとってどれだけ重要かを忍は知っている。海がラスの笑みに弱い事を。
天邪鬼な性格で、でも、本当は凄く寂しがりやな海を忍は愛しいのだ。
忍は心を込めて名を呼ぶ。
「シアーナ」
耳元で呼ばれて、ぞくんと身を竦めながらも震えた声を漏らす。
「ラス……早く……して……」
その言葉に素早く応えるように、忍の手が海のベルトを外し、ズボンと下着を難なく引き摺り下ろしてしまう。辛うじてそれは海の片足に、引っ掛かっている程度になっていた。
「シア、好きだよ」
忍の笑顔が海を翻弄する。
普段、ヤル時は平気で強姦紛いの事をするのに、今日はやけに優しい。
（こんなの、はじめてだ……）
それが、海に火を付けて行く。火傷しそうなほど、熱く燃える。
「……ラス……好き……あっ」
忍の指が身体をゆっくりと滑りながら、でも、的確に性感帯を突いてくる。
「あっ……あ……」
いつもより過敏に反応してしまうのに気付いて、海は忍の首筋にしがみつく。
「シ、シア！？」

「や、ヤダヤダッ！」
「どうしたんだい？」
いつもの忍じゃなく、ラスとして彼は問い掛ける。とてつもなく優しく。
「だ……って、変なんだ……」
おびえた子猫の様になっている海を、優しく髪を梳いて忍はクスッと笑う。
「変じゃないよ。シア、可愛いよ」
「あんっ！」
びくん！
海の身体が大きく跳ねる。空いていた忍の左手が、海のものを優しく捕らえたのだ。
「やぁっ……」
しがみつきながら声を上げる海を、優しく諭す様に耳元で囁く。
「や。じゃないだろ？　ほら……」
「……あぁ……ん」
甘い囁きと共に、ゆっくりと忍の指が動き始める。
「あ……ああ……」
もどかしさと、気持ちよさが細波の様に押し寄せてくる。
「やっ……い、イク……ぅ……」
それだけでもう弾けそうになってしまっていた。けれど、忍はそれを許さなかった。
突然、手の動きが止まる。海は驚いてしがみついていた、腕の力を緩めて忍を見ると微笑をたたえていた。
「……ん……なんで、止める？」
「もっと、良くしてあげるよ。シアーナ」
「え？」
海が訳分からずキョトンとしていると、あれよと言う間に海の身体を反転させてしまう。
「ちょっ……と、ラスぅ？」

忍は四つん這いにされて、焦る海の背中に口付ける。
「んんっ！」
ビクン！　海の身体が素直に反応する。
「ば……バカ！　こんなの……」
「ん？　なんだい？　シア」
「……」
（恥ずかしいよっ！）
そう言えなくて、羞恥で顔が赤らむ。そんな海を尻目に、忍は指先と舌を背骨のあたりを滑らせてゆく。たまらず海が声を漏らす。
「はぁ……ん」
忍の指と舌が双丘を割って、秘奥へ侵入してくる。
びくびくと、海の身体が震える。
「んん――――ッ」
身を捩って逃げようとする海を押さえる様に、忍は空いていた右手で海自身を捕らえて愛撫を始める。
「あっ……ああ……あ……」
背中を反らして海が喘ぎ声を漏らす。
脈打つそれを忍は丁寧に、時には荒っぽく爪で引っ掻く。
「ん……あっ！」
微かに何かが、海の全身に走った様に震えて、そこから蜜が溢れてくる。
荒くなる呼吸の中で海は、忍に潤んだ瞳で懇願する。
「もう……待てな……いよぉ……」
「もう少しだけ我慢しろ」
「やだぁ……」
忍の答えに首を荒く振って、海が嫌がる。
「どうして？」
愛撫の手を緩め様とはせず、冷静に問い掛ける忍に海は悶えながら反論する。
「ヤ、なの……ラスと……一緒に、いきたい……の……っ」

「シア……」
海の意外な答えに驚きながらも、その半面嬉しかったりする。
こんなに素直に言うのは珍しいのだ。いつも、いやっていう程意地悪してやらないと、海は口を割らないのだ。
「判ったよ、シアーナ」
優しく海に声を掛けると、素早くズボンのベルトを外し、ジッパーを下ろして中から熱く張り詰めた己自身を出して、海の秘部に当てる。
「……はやくぅ」
涙声で誘われるまま、忍は先端部分を押し進める。
「……ん〜〜っ……」
瞬間的に強張って反応する海に、容赦なく忍は一気に杭を打ち込む。
「ん――――――ッ！！」
一瞬、息が詰まる。海は奥へ奥へと入ってくる忍を全身で感じていた。
「シア」
優しい声が、背筋を駆け上がって聞こえてくる。
悩ましい吐息が海の口から漏れ、身震いして身体をくねらせた。
「ぁ……ラスぅ……」
内壁に擦れて快感を運んでくるそれに酔いながら、自分の鼓動が目まぐるしく早くなるのを頭の片隅で理解していた。
「あ……あッ……」
海の腰を両手で掴む様に固定して、忍は律動を始めていく。
「やあッ……ラ……スッ……」
忍に突き上げられる度、意識が飛んでいきそうになりながら海は身を任せる。
乱れる呼吸の中で、淫らな喘ぎ声が海の口から紡ぎ出されていく。
「あ……あッ」
いつもの意地悪なやり方ではなく、刺激的で激しいその行為は混

乱にも似た悦楽の境地へと海を落としていく。
「は……ッ……ああっ」
綺麗な海の金髪が幾度も振り乱され、色っぽい嬌声が部屋を満たす。
「ああ……んっ……イ……ク……ぅ」
海が艶やかに鳴くと、忍は更に激しく海を貫いていく。
「あっ……ああぁ――――――――ッッ！！」
ビクンビクンと、痙攣の様に海の四肢が痺れる。次の瞬間に海は白濁とした世界へと意識を飛ばしてしまっていた。
――――――そして、海が気付いた時には、もう夜闇が空を覆っていた頃であった。

「ん……ッ……」
「気がついたか、海？」
ゆっくりと目を開け、海は声をあげた主を見た。
室内の灯りは無く、窓から差し込む満月の光だけであった。その光の中で優しそうな表情で、見下ろしている忍と視線がぶつかる。
「……忍」
海は自分が忍に膝枕してもらってるのに気付く。ちょっとだけビックリしながらも、その心地良さに身を任せてそのままでいる。
「すまない。ちょっとやり過ぎた」
海の髪に指を絡めながら忍が謝った。それを見て海はフッ……と、笑って言う。
「ばーか。何謝ってんだよッ！　お前らしくもない」
（そうそう。いつもは焦らしまくってイカせても、へーぜんとしているクセにッ！）
と、流石に言ったら、二度と謝らなさそうなので言わない海であ

った。
「俺らしくもないか……」
クスッと、口の端に小さく笑みを浮かべて忍が言った。何か意味ありげな微笑だったので、不思議に思って海が問い掛けた。
「なあ……どうかしたのか？」
「ん？　何が？」
「……あ、いや……別に、何となくなんだけど……何かあったのか？　忍？」
海はイマイチ問い掛けに、自信無さそうに言ってしまう。
「……何って？　何が？」
そう、いつもの無表情さで逆に問い掛けられて、海はうぐっと口篭もってしまう。
（ちぇー、人が心配してみりゃコレだ）
「ああ、そーですか。もう、訊きませんよーだっ」
忍の膝から起き上がって、海は不貞腐れた様に言う。
「もしかして、海は俺の事を心配してくれたのか？」
起き上がった背後で、嬉しそうな問い掛けを浴びせてくる恋人にちょっとだけ、かああああ～～っと照れが背中を駆け上がってくるのを感じずにはいられなかった。
「う、う、うるせーなぁッ！　別に俺は心配なんかしてねーからなッ！」
海は背中を向いたまま宣言する。
「はい、はい。愛しているよ」
クスクス笑いながら告白する忍に、ちょっとドキドキしながら海は反論する。
「なッ……なに言ってんだよっ！」
「だから……俺のこと心配したんだろ？」
「……し、知らねーよっ！」
「ほら、こっち向いて」
忍はそっぽを向いていた海を、自分の方へと向かせる。威勢の良

かった反応はどこへやら、海は黙り込む。
「……う……」
「俺のこと愛してるんだろ？　だから、気になるんだろ？」
優しい優しい瞳で、言われたら軍門にくだるしかなかった。
「そ、そりゃーちょっとだけ気になるだけだぜ！　か、髪の毛一本分くらいだけだからな！　そんだけだぞ！！」
海のその言葉は裏返しなのを良く知っている忍は、微笑を湛えて海の唇をとても優しく吸い取る様に奪う。
「ん……っ……」
キスを受けながら天邪鬼な海は、ずーっとこのままでもいいかな……なんて思う。
これはこれで、幸せだから仕方ない。
（でも……一瞬だけ、忍の顔が曇ったような気がするのは、気のせいなのかな？）
幸せいっぱいの状態の海であったが、どこかに小さなしこりが残った様な気がしてならなかった。

予兆

その日の朝、海は忍のキスで目覚めた。
「……ん」
海は重たい瞼をゆっくりと開き、ぼやけた視界の焦点を合わせてゆく。
「おはよう、海」
「……忍？」
視界に飛び込む、麗しの人は優しい瞳で自分を見詰める。
「……眠いーぃ」
眠気に勝てない海が布団を被ると、忍はそれを見て顔の当りの所を捲って、躊躇無く海の口を自分の口唇で塞ぐ。
「んん……っ」
少しして忍の舌が、海の歯を割って進入してくる。静かに深く絡むキスで、イヤでも目が覚めてしまう。
しかも、キスが上手い。
受け入れるつもりはないのだが、ついつい流されて海は自分からも舌を絡めてしまう。
「は……ぁ……」
忍のキスから解放されて、海がぼんやりと優しい微笑を浮かべる彼を見詰めていた。
何だかいつもより穏やかな雰囲気が、部屋中を満たしているようなきがした。
「海……」
「ん？　なんだよ？」
呼ばれて海は不思議そうに聞き返す。
「海。今日から俺は2、3日学校へ行かないからな」
真面目な表情で海に忍は告げた。しかし、海は言われた事の意味

が掴めず、きょとんとしていた。
「はぁ？」
「だから、俺は今日から、実家の方へ行く用事が出来たんだよ。で、なければお前を朝っぱらから起こすかよ」
「実家へ？」
「ああ」
ちょっと呆れた様に忍が、海の問い掛けに答える。
確かに服装がパジャマではない。
出かける前という位に、ちゃんとしているのが判る。
「ふーん。で、いつ帰ってくんの？」
「まだハッキリしてないが、2、3日で帰って来れると思う」
身体を起こして、冷静に自分に告げていく忍を見る。
「2日、3日と言わず一週間位居れば？」
突然の告白につい憎まれ口をついてしまう。
「……もしかしたら、そのくらいになるかもしれないがな」
「え？」
忍の言葉に再びキョトンとしてしまう海を、無視する様に忍は踵を翻す。
「さてと、そろそろ行くかな」
忍は海のベッドから離れ、ドアに近くの壁に掛けてある薄手の黒いコートを持つと、ベッドの上に居る海をそのままにし、さっさとドアの向こうへ行ってしまう。
一人残された海は、ぽつんねん……と数十秒間その空間で呆然としていた。
「……ど、どういう事だよ？　勝手な事言ってサッサと行くとは、俺をバカにしてんのかあいつは！」
海はベッドから飛び出して、部屋を出て階段を駆け降りる。
廊下へ出ると旨そうな、味噌汁等の和食系の匂いが広がっていた。
ダイニングキッチンのカウンターで、忍が風水雷の出した朝食を食べていた。

「のんびりとメシを食うか？　人を無視して」
ちょっとムッとなりながらも海は、ドアを開けリビングルームの中に入る。
キッチンの方でまだ朝食の用意をしている雷は、海を見るなりビックリした様な表情を見せる。
しかし、忍は背後にいる海を見ようとしない。
「あれっ？　珍しいね。海がこんな早く起きるなんて」
「ああ。どっかの誰かさんに起こされたんだよ。まーったく、安眠妨害もイイところだよなあ……」
相変わらずそっぽを向いて食事をしている忍を睨んでから、海は忍の左側の椅子に座り雷に向かって言う。
雷は少し困った様な笑いを零す。
忍とは違った意味で大人びた、穏やかで優しい表情をいつも湛えてる。
アクアマリンの瞳と、茶銀色の腰辺りまでの長い髪を持つ雷。
彼はこの家の家主の一人で、皇家の養子でもあった。なんでも、幼い頃両親と死に別れて近い親戚もいなかった雷は、遠縁に当たる翔の家……つまり、皇家に引き取られ今に至る。
で、どうしてここに大人が居ないのかと言うと、この家は元々翔の両親が白凰学園に入る、翔と雷の為に用意した家だからだ。
家を用意した理由には、二人の持つ『力』のコントロールの為と、寮の共同生活では不自由だろうと言う、訳からであった。
そして、陰明師として、その道では一流と歌われる忍が白凰に入る事を知って決めたのである。実は火鷹の家系と皇の家系は古くからの付き合いが有るらしい。それもその筈、両家には血の繋がりがあったりするのだ。
海自身は良く知らないのだが、実は四人とも遠いとはいえ血縁関係があるのだ。
まあ、血よりも彼等の持つそれぞれの力の絆が、引き合ったと言っても過言ではない。

「ごちそうさま」
忍は朝食を平らげると、雷が出したお茶を飲んで一息入れる。そんな忍を見つつ雷は、穏やかに問い掛ける。
「で、忍。いつ帰って来れるの？」
「2、3日くらいだろう」
「そう、じゃあ、帰ってくる時は連絡してよね。食事の用意とかあるからね」
「ああ、判っている」
そう答えて右隣の椅子に上に置いてある、コートを持つと忍は立ち上がる。
「もう、行くの？」
「ああ、電車の時刻に間に合わなくなるからな」
忍は雷の言葉にさらりと答え、隣に居る海をまたもや無視してゆく。
「じゃあな。行って来る」
雷にそう告げて忍は、廊下へと出て行ってしまうのであった。
「……」
ドアと海を交互に見て雷は、溜息を吐き海に声を掛ける。
「……海、追い掛けないの？」
「知るか！」
憮然と答える海に、困った様に小さく苦笑いをして雷が呟く。
「二人とも素直じゃないんだから……」
「うるさい！」
「ほら、見送ってきなよ」
「なんで、俺が……」
上目づかいに海は雷を見遣る。彼はにこっと小さく微笑む。諭すような微笑に、海は困った様に目を反らす。
「いいから、行った方がいいよ」
「いやだ」
「行っておかなきゃ、後で後悔するよ。今回のはなんか引っ掛かる

んだよね。まあ、僕としても、このまま不機嫌の海の相手をするのも嫌だしね」
「……だって……」
「考える前に行動するッ！」
渋っている海にばしっと雷が言う。
「い、行ってくるっ！」
バッ！　と、リビングから海は飛び出していく。
「……ほーんと、素直じゃないんだから」
雷は海が飛び出して行った開けっ放しのドアを見詰め、溜息混じりに呟いた。
玄関の所で黒のコートを羽織った忍が、靴を履いているところであった。
海が忍の後を追かけてくる。
「忍っ……」
その声に忍は振り返る。
「海？」
「……あのさ……」
玄関先まで海は来ると、ゆっくりと歩みを止めて忍を見る。
「どうした？」
「ん……と、すぐ帰ってくるのか？」
「寂しいのか、海？」
「違がわいッ！　そんなんじゃ……」
「じゃあ、どんなんだ？」
にやりと笑う忍に海は、つい口篭もってしまう。
「う……だから……」
「だから？」
「その……さっさと帰ってこいよなッ！！」
そっぽを向き、投げ捨てる様に海は忍に言う。そんな海を見詰め、忍は小さく笑みを零す。
「出来るだけ早く帰ってくるから、心配するな」

「し、心配なんかしてねーぇよ」
「安心しろ。浮気なんかしないから」
「な、なに言ってんだよッ！」
ぎょっとしている海を楽しそうに見詰めて、忍は愛しい人の頬に手を伸ばし優しく触れる。
「……え？」
「愛しているよ、海」
そう告白すると忍は、素早く海の右の頬にキスをする。
「……なッ……」
言葉を失っている海に、忍は優しい笑みで告げる。
「行って来る」
呆然と突っ立ったままの海を置き去りに、忍は扉の向こうに消えた。
右頬を押さえる様に触れつつ、海は羞恥の嵐に襲われてその場にへたり込む。
「……卑怯だよ……俺があーゆーのに弱いの知っててするんだもんなーぁ」
「ふうん。そうなんだ？」
「〜〜〜〜ッッッ！？」
心臓が飛び出してしまうんじゃないかと思うくらいビックリして、海は振り返った。
そこにはにこやかな表情の雷が立っていたのだった。
「れ、れ、雷ッ！！！」
「別れの挨拶は済んだの？」
「お、お前なぁッ！　俺の背後に立つんじゃねー。びびるじゃねーかッ！！」
「まあまあ。それはいいとして、忍の奴、他になにか言っていなかった？」
「何って……？」
穏やかに問い掛けてくる雷を、不思議そうに海は見上げる。

「何日に帰ってくるって言ってた？」
「何日とは言わなかったけど、出来るだけ早く帰ってくるとは言ってたぜ」
「……」
考え込む雷を見つつ、海は立ち上がって訊く。
「なあ、雷。それがどうかしたんか？」
「あ、うん。まあね……忍の突然の帰省には、何か裏が有ると思ってね」
「裏？」
怪訝そうに問いかける海に頷いて、雷は応える。
「うん。まあ……これはあくまで、僕の憶測に過ぎないんだけどね。海になら、ちゃんとした理由を言ってくと、思ってたんだけどな」
「あいつはなーんにも言わなかったぜ？」
「だから、ちょっと嫌な予感がするんだ。何も起こらなければいいんだけどね……」
雷は玄関の扉に視線を移し言うのだった。

――――予感はいつしか不安へとかわる。

そして、確信へと――――。

嵐きたりて

けたたましく電話が鳴る。
「雷、雷――ぃ。電話に出て！！」
翔の声がリビングに響く。
「バカ！　翔、よそ見すんなよ！！」
海はＴＶ画面に視線を釘付けにしたままで言う。
「うわわ！　やべっ！！」
慌てて翔が、コントローラーを操作する。
二人は共同戦線を張らないと、クリア出来ないシューティングゲームにハマっていた。
「まったく、二人ともゲームに熱中して」
文句を言う割には、雷のその顔は楽しそうな笑顔である。
ダイニングキッチンで夕食の用意をしていた雷は、そこから出て部屋の片隅にある電話の受話器を取った。
「はい、皇です」
にこやかに対応する雷の様子が一変する。
「お母さん！？」
その声に翔がピクリと反応して、ストップボタンを押してゲームを中断した。
「え？　母さん！？」
海は何事かと思いつつも、翔と一緒に顔を見合わせた後、雷の方へと視線を移す。
「ええ、何かあった事は何となくですが……」
雷の表情が変化していくのが見て取れる。
「えええっ！？　本当ですか！？」
びっくりした表情でどうやらただ事ではない様だと感じて、翔と海は立ち上がって雷の方へ近付く。

「――判りました……行きます。そう、お伝え下さい」
雷の神妙な態度に二人は口を出す事が出来ない。
「はい。翔には話しておきます」
「……」
翔と海は顔を見合わせつつ、雷の表情を眺めた。
「あ、いえ、僕達だけで行きますから……はい、大丈夫です」
礼儀正しく対応する雷を心配そうに見詰める翔。
「一体なんだろうな、翔？」
ぽそっと呟く海に、翔がこくんと頷く。
ツーツーと、雷の離した受話器から音が漏れる。
「ねえ、今の母さんだったんでしょ？」
翔が雷の服を掴んで問い掛けた。
「うん。そうだよ」
受話器を置き、落ち着いた表情で雷が頷いて答えた。
「何かあったの？」
「あった……と言うか、これからあると言うか――」
しどろもどろに言いながら、翔から視線を海に移す。
「え？　何それ？」
目をぱちくりさせながら、翔は首を傾げる。
自分を見詰める雷に、何やら嫌なものを感じて海は眉を寄せる。
「……」
溜息を一つ吐いてから、雷は言葉を紡ぐ。
「実は火鷹家から、僕達を招待したいって連絡があったんだよ」
「招待って何の？」
翔は言葉の真意が判らず雷を見た。
海と翔を交互に見つつ、雷が深呼吸してから言う。
「婚約披露会だって」
「婚約って、誰と誰が？」
首を捻る翔の横で海が青ざめる。
「……冗談だろ？」

「冗談ではないみたい」
「ええっ！？　も、もしかして、忍の！？」
やっと、事の真意が呑み込めて翔が叫んだ。
「忍と、薙野家の娘との婚約披露会だと……」
ガタン！！　と、物が落ちる音で雷達はそちらに視線を移し、ギョッ！！　とする。
「なーーーんですってぇーーーー！！！」
そこには、金色のふわふわの髪で蒼い瞳の美少女が、怒りのオーラを発して立っていたのである。
翔も雷もそして、兄である海ですらもその気迫に息を呑んでしまう。
彼女の名は、ティア・アリナス。海の双子の妹だ。
精霊界で起きた事件を境に、人間界で暮すようになった。とはいえ、勉学の為に精霊王の許しを得て来ていたりする。でなければ、精霊界で『水の巫女』と言う重要な地位にいるティアは、容易に人間界に出て来れはしない。
「一体どういう事ですか！？」
いつも笑顔を絶やさない、彼女が雷に凄む。
「あ、あのな。落ち着けよ……ティア」
「お兄様は黙っていて下さい！！」
「は……はい」
ピシャリと言い放つティアに、たじろぐ海だった。
「雷、どういう事かちゃんと説明して頂けますね？」
有無を言わさぬ口調に、雷が応える。
「いえ、あの……僕もはっきりした事は言えませんが……」
ティアの気迫に気圧されながら、雷は翔の母親からの電話があった事を話す。
「ゆ……許せませんわ！！　忍様の御実家は何所ですの？　行ってとっちめてやりますわ！！！」
力説するティアに翔がびくつく。雷は困惑した表情で海を見詰め

る。
「はあ……」
溜息を吐いて、海がフォローに回るのだった。
「ティア、騒ぎを起こしたら精霊界に帰る事になるぞ」
「うっ……」
その言葉にティアの動きが止まる。
「だって、お兄様！　私……忍様とお約束しましたのよ！？　お兄様を……シアーナお姉様を幸せにするって！！！」
泣きそうな表情で訴える妹に海は困った。
「それなのに――お兄様は何とも思わないの？」
叫ぶティアに、海は一言も反論出来ないでいた。
許せないと思う気持ちと、仕方ないと思う気持ちが混在していたから。
「～～っ……お兄様の馬鹿ぁッ！！！」
床に落とした鞄を掴み、ティアは兄にそれを投げ付ける。
「うわっ！！」
間一髪、それを受け止める海だった。
しかし、ティアは踵を翻して玄関の方へと走って行ってしまう。
バタンッ！！　と派手にドアを閉める音で、外へ行ってしまったのが判る。
「ティア、泣いてたよ」
翔がぽつりと呟いた。

乱入？突撃？

電車に乗り込むと４人座れる向かい合わせの席に、海達は腰を下ろした。窓側に海と翔、通路側にティアと雷が座る。
「なあ、雷」
「何、海？」
海の問い掛けに、雷はいつもの穏やかな表情で聞き返す。
「あのさ、忍の家ってドコにあるんだ？」
「鎌倉だよ」
と、かなりあっさりと答えてくれた。
「それよりも、頼んでおいた物は用意してくれたよね？」
雷がにこやかに話を切り返す。
「ああ、バッグの中に入ってる……けど、あんなモン一体どうするんだ？」
一抹の不安を感じながら、海は眉を寄せた。
「私が後で着るんです。流石に私服とはいきませんから」
横にいるティアが口を挟んだ。
出掛ける前に海は実家に寄って言われるがままに、着物を5、6着程バッグに放り込んできたのだ。
「ふうん……」
気の無い返事を返して、海は窓の外に視線を移す。
流れる風景を見ながら海は、一緒に来てしまった事を少し後悔し始めていた。
それでも、ティアが付いて行くのを放っておけなくて来てしまったのだ。
「ねえねえ、雷！　どっかで美味しいケーキ食べてから忍の家に行

こうよ」
瞳をキラキラと、瞳を輝かせてさせて翔が言う。
雷が苦笑しながら、諭そうとする。
「あのね……遊びに行くんじゃないんだよ？」
「ええー。だあって～～っ、和菓子は出るけどケーキは、出ないじゃん！」
翔は忍の家で出される茶菓子を考えてぼやく。
「それにさあ～～」
ごそごそと懐から小さな本を取り出すと、にこにこと笑って告げる。
「折角、来たんだから寄って行きたいじゃん！」
本のタイトルは『美味しいケーキ屋さん』となっている。
「……」
雷の瞳は助けを求める様に、ティアと海を見詰める。
「私はどちらでも」
と、ティアが答える。
「好きにしろよ」
海がそっけなく言う。
「わーい♪　じゃあ決まり！！」
翔はご機嫌な笑顔で決定してしまう。
「しょうがないなあ……」
雷は困った様に言うが、翔の笑顔を見てると反対する事も出来ない様であった。

再会

立派な門構えが海達を迎えた。
「へえ……」
昔からそこに建っている事が窺い知れる程の、古い造りの門だった。
――――この向こうにあいつがいる。
そう思うと、海は何故だか少し怖くなった。
でも、背を向けて逃げられない状況も事実だった。
「……」
じっとしたまま立ち尽くす海に、声が掛かる。
「お兄様？」
「……海？」
「え！？」
はっとなって、海は声の主達を見た。
「海、付いて来ないと迷子になるよ」
雷の言葉に素直に謝る海。
「ああ、ごめん」
「そーそー、迷子になるもんねー」
能天気な翔が突っ込みを入れる。
「こら、迷子になったのは翔だろ！」
その翔にすかさず突っ込み返す雷。
「う！！」
その言葉にしょぼんとなる翔であった。
「だって広すぎるんだもん、ここん家って……」
ぼそりと呟く翔を尻目に、
「さ、行くよ」
雷は何事も無かったように皆を促した。

綺麗な日本庭園をゆっくりと進む。
行き届いた木々の管理が、一層庭の荘厳な景色を醸し出す。
暫く歩くと人の声が聞こえて来た。
「……庭師かな？」
翔の言葉に、声が聞こえた方へと視線を移す。
声はどんどんこちらに近付いて来る。
「……ちょ……待って下さい」
女の人の声だ。
「俺は、話す事など無い」
男の声が聞こえた。
海はその声にドキリとした。
紛れも無く忍の声だったからだ。
「待って！！」
女の声を背に歩道の脇道から姿を現したのは、ここ数日間顔を見ていなかった忍であった。
「！！！」
一瞬、息が詰まってしまい何も言えない海。
「あ！　忍じゃん！！」
能天気な翔が声をあげた。
「え？　翔、雷……ティア」
目の前の人物を確認しながら、忍が呟く。
「お招き、有難う」
にっこりと笑う雷は、社交辞令そのものだった。
「雷に連れて来てもらいましたの」
と、ニコニコ顔のティアの背には怒りのオーラが燃えている。
どうやら、二人ともこの招待にはかなり不服の様子なのが窺えた。
怖いと思うよりも、何か言わなければと言う衝動に駆られて出た言葉が、
「よお……」
であった。

「……海、よく来たな」
そう言って、忍は笑った。
ドクン！！
心臓を鷲掴みにされたような感覚に海は、どうすればいいか判らずそっぽを向く。
「……」
その沈黙を破るように現れたのが、先程から忍を追い掛けていた女だった。
「忍さん！！」
そう言って飛び込んで来た、女性は年の頃は海達とさほど変わらない様だった。
美人と言う言い方がピッタリくる、着物を着た和服美人だ。
少し目つきがきつい印象を受けたが、そこがチャームポイントと言えなくもない。
「友人が来てるんだ、邪魔しないでくれ！」
忍が言い放つと、すかさず深くお辞儀をして口を開いた。
「失礼しました。私、忍さんの婚約者で、薙野深紅と申します。」
「！！！！」
それを聞いた途端、海は踵を返して走り出す。
荷物なんかどうでも良かった。
ただ、その場から逃げたかった。
「海！！」
忍の声がする。
しかし、海はそれを振り切る様に走った。
（何も聞きたくない。何も知りたくない！！）
庭の中をどう走ったのか判らないが、大きな池の前にいつの間にか着いてしまった。
池の水面を見詰めながら、海はぽつりと呟く。
「来なければ良かった……」
来なければあんな娘と会う事も、知る事も何もないから……。

でも、来てしまった。
浅はかな自分を呪わずにはいられない。
「なっさけねーー」
「何が情けないんだ？」
「！？」
心臓が飛び出るくらいビックリして、海は思わず振り返った。
「どうして俺から逃げる？」
「！！！」
目の前にいるのは、海の恋焦がれている相手だった。
足がガクガク震えて、どうしていいのか判らない。
声すら出せない。
「海……」
見詰める瞳が怖い。
そう、頭の隅で思った。
逃げ出したのに、逃げ出せない。
「……」
「海？」
ザリッと地面が音を発てた。
忍が一歩一歩近付いて来る。
（来ないで……）
海が一歩後ず去った途端、ズルっと滑って宙を舞う。
「え？」
「海！！」
忍の声を聞きながら、海はその身を池の中に沈めた。
ひんやりした水の冷たさに身体を浸したままでいると、強い力で水から引き上げられた。
「海！」
目を開けると、息が掛かる位の距離に忍の顔がある。
「……忍」
ドキドキと鼓動が高鳴ってしまう。

「は、離せよ！」
身じろぐ海を押さえ付けるように、忍が抱き締める。
「いやだ」
「は……離して」
苦しかった。
胸が。
呼吸が。
身体が、悲鳴を上げる。
「海」
優しい声で忍が呼ぶ。
（呼ばないで……）
ふるふると、海は首を横に振る。
「海……」
海の頬に忍の手が触れた。
「いや……」
絞り出すような声を塞ぐように、忍の唇が海の唇に重なる。
「ん……ッ」
甘く痺れる様な感覚に呑まれる。
（どうして――――！？）
海は深い口付けに、気が遠くなって行く……。
ずるりと全身の力が抜けて、何も考えられなくなる。
忍の肩に顔を埋め、海は意識を手放した。
忍が実家に帰ってから、殆ど寝ていなかった海はどろどろとした睡魔に囚われたのだった。

矛盾だらけのキモチを抱えて（前書き）

ムリヤリ的なえっちぃシーンが御座います。
苦手な方はUターンをお願いします。

矛盾だらけのキモチを抱えて

貴方が好き。
心から愛しています。
ずっと一緒よ。
ラス……。

その言葉に嘘、偽りなど無かった。
死ぬまで……息を引き取る間際まで、あの人が大切だった。
自分の総てだった。
命を投げ出せる程の絶対的な恋。
なのに。

迷っている。

離れたくないのに、離れてしまいたい。
好きなのに、好きだから……。
矛盾した感情――――。
「もう、嫌だ……」
苦しくて、切なくて、涙が溢れる。
「助けて……」
あの時と同じなんて嫌だ。
シアーナと同じ様に選択権が無い状況なんて……。
また、離れ離れになってしまうのは嫌だ！
もう。
離れたくないよ……。
「……ここに……」
声がする。

「ここにいるよ」
優しい、声。
「海……」
優しい声……。大好きな、あの人の声。
（呼んでいる……？）
「海」
（あいつが呼んでいる？）
ゆっくりと、重い瞼を開けて海はようやく現実へと戻る。
「……？？」
目の前にいる人は夢だと思った。
自分の願望が見せる空しい夢……。
「また……夢？」
ぼんやりと呟く海に、忍はキスをした。
唇が離れて、その感触を確かめるように海は自分の唇を指でなぞってみる。
「海……」
浴衣を着いる忍は、自分の名を呼んだ。
目をぱちくりさせて海は、彼の人をひとしきり見詰めた後、ゆっくりと手を伸ばして彼の頬に触れてみる。
暖かい温もりが伝わる。
「しのぶ？」
「ああ、俺だよ」
にっこりと笑う。
「あ、あれ？」
目の焦点がようやく合った海は、自分が何をしているのか気付く。
「俺、どうしたんだ？」
キョロキョロと辺りを見回し、布団に寝ていたのだと認識する。
上半身を起こし、自分の姿を確認して驚く。
「あれ！？　俺の服は？」
忍と同じような浴衣を身に纏っている。

「洗濯してる」
そっけない答えが返ってくる。
「ああ、そっか、池に落ちたんだっけ……」
微かな記憶を頼りに、何があったか思い出してみる。
「そのまま、気を失ったんだぞ。お前」
忍は少し心配そうな表情で、そう海に告げた。
「……」
無言になる海に、忍はそのまま続けて言う。
「海。お前、ここ最近あんまり寝て無いんだって？」
忍の問い掛けにギクリとする海は、バツが悪そうな表情を浮べる。
「俺が、こっちへ来てからか？」
ずいっと身体を近づけて、忍が訊いて来る。
近付いた距離にドキリとしながらも、海はポソリと呟くように言う。
「う……ん。たぶん……」
ここ数日、昔の悲しい夢で……嫌な夢ばかりを見ていて、寝るのが怖くなっていた。
不安で、不安で……その重さに押し潰されそうだった。
「……海」
青ざめた顔つきの海にそっと名前を呼び、頬に軽くキスをする。
「忍？」
海の瞳が、忍を捕える。
目が離せない。離したくなかった。
「黙ってろ」
耳元で忍は海に囁くと、そのまま押し倒す。
「……でも」
小さく抵抗する海に、忍は唇を重ね合わせた。
「んッ……」
深い口付けに抵抗する海だったが、忍に容易く組み敷かれてしまっては逃げる事すら叶わない。

「や……っ！」
するりと胸に入り込む忍の手に、ビクリと海の身体が硬直する。
「やだ！！」
はっとなって、海が暴れ出す。
「こんな……んんんーー」
場所でするつもりか！！　と海は叫びたかったが、忍の唇が総てを奪い取る。
次に唇が開放された時、海は忍を睨みつける。
「ふざけんな！！」
「ふざけてる様に見えるか？」
「見える！　こんな所で誰かが来たらどうするつもりだよ！！」
「……大丈夫だろ。ここは俺の部屋で、離れだしな」
淡白に答える忍を、怪訝そうに見遣って。
「あの、女は？」
海の脳裏に深紅の姿が浮かぶ。
「深紅の事か？」
「ああ、そうだよ！！」
胸の奥底から湧き上がる嫌な感覚に、海は嫌悪を感じた。
「あの女、お前の婚約者なんだろ！？」
「勝手に言ってるだけだ」
「嘘だ！！　雷に聞いたぜ、婚約披露だって言うじゃねえか！！」
ギロリと精一杯、海が睨むと。
「俺は承諾していない。親と向こうが勝手に言っているだけだ」
いつもと変わらない表情で忍は答える。
「だから、どうだって言うんだ！　あの女がいるのには変わりないだろ！」
――――悔しい。悔しい。許せない。
でも、それは仕方の無い事で……。
自分は男で……でも。それでも……好きだから……。
「離せよ！！　触るな！！」

海は思い切り忍の手を振り払った。
「海！？」
驚いて自分を見詰める瞳とぶつかって、海は動揺する。
「あ……」
「海、そんなに嫌か？」
「……」
言葉が出ない。

何か言いたいけど、口に出せば非難しか出てこない。
「……お前、俺が深紅と婚約してもいいのか？」
冷たい瞳が海を見詰める。
ゾクンと、背筋が寒くなるのを海は感じた。
「い……いいよ。勝手にすればいいだろ！！」
瞼をぎゅっと閉じて、海は叫んだ。本当は「嫌だ」と言いたかったのに、口から出たのは反対の言葉だった。
「……本気で言ってるのか？」
冷たい、凍りついた忍の瞳が海を見た。
「あ……ああ。好きにしろよ」
俯いて忍を見ようとしない海は、吐き捨てるように言い放つ。
（その方が良いのかもしれない……俺といるよりもその方が……）
そう思わずにはいられない海だった。
「お前がそのつもりなら……」
忍はガッ！！　っと、海の両手首を掴むと強引に布団に縫い付ける。
「うわっ！？」
驚いて海は目を見開く。
クロスさせられた手首は、海の頭の上に固定された。
「しの――――んんっ！！」
忍の唇が海の口を封じ込める。
右手が無理矢理に、海の着ている衣を引き剥がす。

「！？」
忍の舌が口内に侵入してくる。絡み付く舌の動きに、海はどうしていいか判らなくなる。
肌を滑る忍の手に、海はハッとなる。はだけた浴衣の下には、何も纏っていない事に気付く。
（全部脱がされていたのかよ！？）
「む～～っ！！」
なんとかしようとしてもがいてみるが、身体は布団に縫い付けられた様に動かない。
「！！！」
内股に入り込んで来る忍の手に、身体が竦み上がる。
何が起こるか想像出来てしまうから、更にたちが悪い。
「ん……んんっ」
口内を蹂躙する舌の動きに、流されそうになる。
（こんなトコで……なんて、冗談じゃねえ！）
必死に抵抗するけれど、忍の手が海のそれを包み込む。
「ふっ……ん」
ビクン！　と、海の身体が跳ねる。
包まれたそれを上下に扱かれると、嫌でも反応してきてしまう。
この状況から逃げ出せない自分が悔しくて、海の瞳から涙が出て来てしまう。
「……ん……ふ……ぅ」
もどかしい動きが海を熱くさせていく……。
（もう……ダメ……）
高まる鼓動と共に、海は忍の手の中に放出してしまう。
「はぁ……っ……」
封じられた唇が解放されて、肩で呼吸する海の耳元に唇を寄せ、忍はクスリと笑う。
「早いな。溜まっていたのか？」
その言葉に海は、かああっと赤くなる。

「離せよ！　馬鹿！！」
もがく海の意に介さず、忍の左手は海の手首を固定したままであった。
「嫌だね」
そう答えると、忍の指は海の双丘を割って秘奥に進入する。
「ひっ！？」
挿入された指の感覚に、海の呼吸が止まる。
「やっ……う……んっ」
中に進入してくる異物感に、思わず声が漏れる。
「感じてるのか？」
耳元に唇を寄せて忍が囁く。
「ふ……ざけんな……っ」
悪態を吐く海に見ながら、忍はクスクス笑う。
「ひっ……んん……」
忍の指が中で蠢いて、海が悲鳴を上げる。
「や、やだ……ぁ……」
久しぶりの感覚に、身体の奥が疼いてしまうのが嫌で海は抵抗する。
「ここは嫌がってないぜ？」
「やめ……っ」
忍の囁きに、羞恥心が海を襲う。
「ひ……っ……」
ずるりと指を秘奥から引き抜かれ、一瞬呼吸が止まる海。
「海」
囁きと共に忍のアレが、海の蕾にあてがわれる。
「やだ！　嫌だ！！」
忍は暴れる海を無理矢理貫く。
「うぁ……っ……ん」
忍は今まで自由を奪っていた海の両手を解放すると、腰を抱え込み荒々しく突き動かした。

「あ……あぁ……」
激しく貫かれ、海の理性が吹っ飛びそうになる。
（こんなの……こんな所でなんて……嫌なのに……）
「や……あ……っ」
嬌声が口から漏れ始めてしまう。
（感じるなんて……！）
「海……愛してる」
忍に優しく囁かれて、海は胸が苦しくなる。
他に代わりなんていない。目の前の人だけが自分の総てだから。
（俺は……あの女に嫉妬していた……。忍の傍に居るから）
「あっ……やぁ……」
何度も何度も激しく貫かれながら、海は忍の背に手を回す。
暖かい肌の温もりを求めて。
「忍……」
小さな声で海は、彼の名を呼ぶ。
それでも、海は怖かった。自分だけがこんなに好きだと思っているから。
いつか離れていくなら、今の方が良いから……。
離れられなくなる前に、離れてしまう方が良いと思った。
でも……。
初めから離れられない……魂が引き合う。
強い、強い力で結びついているから……。
「す……き……っ……」
消え入りそうな声で、海は呟いた。
海の瞳から、大粒の涙が零れ落ちていった。

ケンカするほど・・・

「ったく……喧嘩するわりには、やる事だけはヤるんだね」
呆れた様な、でもホッとした表情で雷が言った。
「……」
布団を被りながら、海は強姦紛いとは言え、流されてやってしまった事を後悔していた。
「で、何が言いたい？」
悪びれずに忍は、雷に言い返す。
「別に。でも、良かったね」
クスクス笑いながら、雷がにこやかに言う。
「どこがいいんだよ！　ったく……」
布団の中で海は悪態を吐く。
「あ、それよりもさっきそこで、あの子に会ったよ？」
海の言葉をさらりと聞き流して、雷が忍に告げた。
「深紅か……」
忍は嫌気に呟く。
（え……？　ちょっと待てよ……？）
頭の中で整理して、ヤバイ事に気が付く海。
「え！？　マジかよ！！」
がばっ！！　と、布団から半身を起こして叫ぶ。
雷がこっちをじい～～っと見詰める。
「？」
眼と眼がぶつかる。にっこりと微笑まれて、海は慌てる。
「海、胸元が肌蹴ているよ」
「えっ！？　う、うわわああ～～っ！！」
肌には忍が付けた、キスマークがしっかりと残っていた。
それを隠すように、海は浴衣をちゃんと着こなして息を吐く。

キッ！　と横に座っている忍を睨み付けるが、ポーカーフェイスの鉄壁には効かなかった。
「……い。兄貴ぃーーーーっ！！」
「ん？」
声と共にバタバタと、急いだ足音が近付いて来る。
「なんだあ？」
きょとんとする海とは対照的に、忍と雷は誰だか判っているのか至って平然としていた。
バン！　と障子が勢い良く開いて、少年が飛び込んで来た。
「兄貴！」
黒い学ランを着た少年は焦った様子で、忍を真っ直ぐに見詰める。
「もう少し静かに出来ないのか？　漣」
窘めるように忍は、彼にそう言った。
「あ、ごめんなさい」
ぺたんとその場に正座すると。
「久しぶりだね、漣くん。元気にしてた？」
にっこりと笑って雷が、漣に声を掛けた。
「お久しぶりです。雷さん」
ペコリと漣が頭を下げる。
「……」
ふと海と漣の目と目が合う。
「……えっと……そちらの方は？」
漣が海を見詰めて問い掛けた。
「あ、俺？」
自分を指差しながら、きょとんと海は言う。
「光月海と言ってね、僕達と一緒に住んでいる仲間だよ。漣君」
と、雷がにこやかに紹介をしてくれた。
「はじめまして。俺、火鷹漣、中3です。よろしく」
ぺこりと挨拶する漣は、良く見るととても人懐い容姿をしていた。
流石に弟だけあって、忍を可愛らしくした感じと言っても良いだろ

う。
「こちらこそ……よろしく」
（まさか、兄の恋人とは言えんよなぁ――――）
チラリと忍を見遣ると、何事も無い様な顔付きで、弟に問い掛る。
「で、漣。慌ててどうしたんだ？」
「あ、そうだっ！　兄貴、本気であの薙野深紅と婚約するつもりなのかよ！？　さっきここに来る途中、母屋で会ったけど……なんか嫌な感じがした。何か企んでいる様な目付きだったし……」
「ふーん」
冷静な口調の忍に、漣は少し怒ったように言った。
「ふーんって、兄貴！！　昔、良く話してくれた『彼女』じゃなきゃ嫌だって言ってたじゃん。兄貴の気持ちはそんなものなのかよ！？」
捲し立てる漣を見て、雷は微笑ましそうに笑ってる。
「……え？」
（って、もしかして、『彼女』って『シアーナ』の事！？）
海は忍と漣を交互に見詰める。
視線を感じたのか、忍は少し困った表情になって。
「あのな、漣。早とちりをするな」
「え？　それって……？」
「俺は、深紅とは婚約するつもりは無いぞ」
「本当に！？」
漣は忍の言葉に身を乗り出しながら訊き返す。
「ああ」
忍は念を押す様に頷く。
「ああ……良かった～～。俺、兄貴には『彼女』と幸せになって欲しいんだ」
ホッとする漣は、にぱっと笑ってそう言った。
（なーーーんか、良心が痛むなあ……）
海は複雑な表情をするしかなかった。

二人を尻目に事情を知っている雷は、クスクス笑って言った。
「ホント漣君は、お兄ちゃん子だよねー」
「べ、別にそういう訳じゃないけど……兄貴にはこの家に縛られて欲しくないんだ」
雷に言われて照れながらも、そう答えたのだった。

セツナイキモチ

雷と漣が部屋を出て行ってしまった事を確認してから、海は忍に迫って怒鳴った。
「お前！　シアのことを話してやがったのか！！」
「別に何か問題でも？」
「大有りだッ！」
「どこが？」
あっさりと言葉を返す、忍を海は睨む。
「全部だ、全部！！！」
「俺の昔話を弟にしたら悪いのか？」
忍にそう問われて、海は口篭もる。
「うっ……」
（確かに、自分の過去を話しちゃいけないってコトはない）
そんな海を見ながら、クスリと笑って忍が言う。
「それに、漣に話したのはお前と出会う前に時だったしな」
じぃーーっと、海は納得いかない表情で忍を見詰める。
「今、現在の事は教えてないから安心しろ」
「でも……」
忍は小さく反論する海の腕を掴み、身体を引き寄せる。
「あっ！」
声を発する海を優しく包むように抱き締めた。
「そんなに嫌だったか？　話した事」
忍の胸に顔を埋めて、海は首を横に振る。
「ごめん、言い過ぎた」
謝る海の髪を梳いて、忍は問い掛けた。
「俺の事、嫌いになった？」
つい……っと、海は顔を上げて忍を瞳に映す。

「嫌いになんてなれないよ。だって……」
こんなにも、胸が痛い。
こんなにも、切なくて今にも涙が溢れそうになる。
数日間、離れただけで不安が押し寄せる。
ずっと、一緒にいたいと心が叫ぶ。
潤んだ瞳で、海は忍に訴える。
「俺……どうしようもないくらい、忍が好きだ」
真っ直ぐに見詰める瞳をゆっくりと閉じながら、海は忍の首筋に手を回す。
静かに海の唇が、忍の唇と重なっていく。
「んっ……」
海からのキス。
殆ど自分から求める事をしない海にとって、かなりの勇気がいるキス。
「……っ……」
おずおずと、舌を出して海が誘う。それに応えるように、忍は舌を絡ませてくる。
深い口付け。
お互いを求め合うキス。
甘く切ない一瞬……。

決戦前に・・・

翌日の朝――――――。
「じょ……冗談だろ？」
海は背中を壁にはり付けて、目の前の二人を見て言った。
にっこりと、笑って応えるティアと雷。
「観念した方が良いんじゃない？」
「覚悟しなさい。お兄様」
「いやだ！！」
追い詰められても反対する海に、雷は手に持った綺麗な桃色の着物を見て言う。
「着慣れてるんだから、良いじゃないか」
「ふざけんな！　それ、女物だろーが！！」
「でも、着慣れてるでしょ？　日舞で」
雷は着物をびろーーんと広げて、海にさらりと言い返す。
「それと、コレは別だ！」
噛み付くように海は吠える。舞で着慣れている着物だが、どうしてこの場で着なきゃいけないのだろうか。
「お兄様」
じろっと睨むティアに、海は「うっ」と言葉を詰まらせる。
「……だって……」
「そーなに嫌がるなら、私が代役しても良いんですのよ？」
「それも……ちょっと……」
忍の婚約披露の場をぶち壊す為に、『恋人』がその場に現れればどんな事になるのか明白である。
あの深紅が簡単に引き下がる筈も無い。
海は初めて見た時、そう思った。
忍への気持ちは『本気』だと感じた。己が忍に相応しいと言う自信に満ちていた。

だからこそ、忍の彼女が出なければ深紅との婚約も破棄されないだろう。
「……やんないとダメ？」
「駄目です」
キッパリとティアに言われ、海は渋面を作る。
（この様子じゃ、服を脱がしてでもやるよな……ティアは……）
「〜〜〜〜。判ったよ！　やりゃあいいんだろ！！」
（やったろーじゃねえか！　こんちくしょーーー！！！）
海はやけくそに叫ぶ。
それを見て、ティアはいつもの優しい表情に戻る。
「その言葉、しかと聞きました。では、私は部屋から出ますね。着替えたら呼んで下さいね！」
そう言うとティアは、障子を開けて廊下へ出て行く。
「はああ……」
盛大な溜息を吐く海を見詰めて、雷が苦笑いをする。
「海？　大丈夫？」
「……なんとかね」
海は深呼吸をして、じっと見詰めてくる雷を見遣ってから。
「悪いな、雷。こんな事に付き合わせてちまって」
「いいよ。面白そうだしね」
雷はそう言って、クスクスと笑う。
「面白いか〜〜？」
海が苦虫を潰した様な顔をすると、雷はにっこりと微笑む。
「こんな時じゃないと、忍の本音とか本気を見れる機会なんてないものね」
「あのなー、俺が悪者になるんだぞー？」
「いいじゃない。忍は海の恋人でしょ？　ずーーっと前からの」
「……間違っちゃいねえけど……」
ぼそぼそと言う海に、雷は続けて言った。
「なら、海には権利あるよ。ま、忍は海以外の人間と付き合うつも

り微塵も無いだろうけどね」
　ウインクして笑う雷を見て、海は顔を赤らめた。
「ね。こんなふざけた茶番劇なんて、さっさとぶち壊しちゃおうよ。見てる僕らも腹立つしね」
「……雷が一枚噛んでるって不味いんじゃ？」
　そうは言っても、火鷹家と懇意にしている皇家の人間なのにぶち壊し作戦に参加するのは、いただけないんじゃないのだろうか。
　そう思って、海は雷を見詰めた。
「平気、平気♪　僕と翔も、海と忍の味方だよ。それに、皇の家には来なくても良いって根回しをしてあるから安心してよ」
　ケラケラと笑って答える。
「……まじかよ」
（素早い……）
「まあ、殆どかなり懇意な付き合いの家だけを呼んでるから、盛大にぶち壊しても大丈夫でしょう」
　にこにこ顔で、怖い台詞を吐く雷に驚く海。
（おいおい、それって言い換えればかなりヤバイんじゃないの！？）
「……」
「ここまできちゃったんだし、やるっきゃないよね！！」
　ダメ出しの如く雷が言う。
（いいのかなぁ？）
　それでも、海は疑問に思ってしまう。
「……俺が男だとバレたら、あいつはカミングアウトしちまうんだぞ？」
「それはそれで、面白いよねー♪」
（いいんかー！？　そんなんで！！）
　にやりと笑う雷は、とっても楽しそうだ。
「……えーーーい！！　とっととやっちまおうぜ！！」
　意を決して、海は叫ぶとドスドスと畳を鳴らす勢いでバッグの所まで歩く。

バッグの中から、帯やかつら等をゴソゴソと取り出して海は服を脱ぐ。
「手伝おうか？」
雷の言葉に、海が答える。
「んー、大丈夫。自分で出来るから」
テキパキと着込んでいく海を見ながら、雷は「流石だね」と納得した声を漏らす。
「雷、それいいか？」
海は指差して、雷が持っている着物の事を言った。
「あ、うん」
雷は海に着物を、ほいっと手渡す。　鏡の前に立ち桃色の着物に袖を通していく。手馴れた手付きで帯を巻いていく。
「よし、終わりっと」
鏡の前でクルリと回って、海は変な所が無いか確認する。
「次は……」
海はバッグの中から化粧用具袋を取り出すと、鏡の前に正座をし、かつらを被る。
「……あのさ、海」
「ん？」
「訊いてもいいかな？」
「いいよ」
雷の問い掛けに応えながら、海は化粧をしていく。
「なんか雰囲気違うんだけど……？」
海をじっと見詰めつつ、雷は続ける。
「何ていうのかな？　物腰とかが全然違うんだけど……いつもの海と」
「ああ。違うよ」
あっさりと答えて、海は鏡の向こうで穏やかに笑う。
「自分が何者かバレない為に、こういう格好すると口調とかが変わってしまうんだ。『光月海』として舞を踊る訳じゃないからね。ま、

小さい頃からそういう風に、教え込まれてるって言う事もあるけどね」
海の叔父は茶道『光月流』の家元。実際には、長男の海の父親が継ぐ筈だったのだが、画家になってしまった為に弟が後を継いだ。
叔母の実家は日舞の『華琉院』の家元って事もあり、踊りを教わっていた。
この夫婦には子供がいない為、幼い頃から父親が海外に出掛ける時は、海を預かっていた。そして、実の子の様に可愛がってくれている。
「他にも理由があるんじゃない？」
雷の言葉に、海の手が止まる。
「まあね。父親は殆ど海外暮らしで、母親は死んだと聞かされてて、寂しくない子供なんていないよな。でも、叔父夫婦が実の子供のように可愛がってくれたけど、それでもやっぱり寂しいものは寂しいんだよな」
「そうだよね……」
くすりと笑う海の気持ちが判る雷は、憂いを帯びた瞳で微笑む。
「だからかもしれない。踊りや、お茶とかをやって気を紛らわせてた。そうやって、何かに縋ってた。雷だって同じだろ？」
「それでも……僕には、翔が居てくれたからそんなに寂しくは無かったんだ。翔が僕の代わりに泣いてくれたしね」
天涯孤独の身の上なのに、雷にはいつも翔が居た。
「泣きたい時、寂しい時、悲しい時、いつでも傍に居てくれたから……僕よりも泣き虫だったからね、翔は。だから、泣いてる暇は無かったよ」
クスクスと思い出した様に笑う雷。
「大変だったろ？」
「そりゃあ、もう」
海の問いに雷は、力説する様に頷いて答える。
「ねえ。海」

「ん？」
「海は、今、幸せ？」
「幸せかなぁ……ティアにも、母さんにも逢えたし、雷と翔と一緒に居るの楽しいし……それに、忍とも逢えた」
（ラスとの想い出も……約束も思い出したし……）
なんだかんだ言っても、今の暮らしはとっても充実している。
「もう、大切なものを失いたくないから……」
（……昔の様に間違えない）
海の瞳に決意が宿る。
唇を閉じ、すーっとピンク色の紅をひく。
「……」
大きく息を吸い込み、吐き出すと海はゆっくりと立ち上がる。
「さあ、いこう」

邂逅

海は忍に手を引かれて、中庭の入り口にエスコートされた。
「……」
忍の横顔を見ながら、海は何と無く懐かしい気分になっていた。
（こうやって、昔、エスコートされたっけ……）
「……シア」
「えっ？」
忍に声を掛けられ、海はビクリとする。
「こんな茶番に巻き込んで悪かった」
海だけに聞えるように、忍が言った。
「あ……うん……」
「さっさと終わらせて帰ろう」
そう言って忍が小さく笑うと、海はコクリと頷いて答える。
目に入ってくるのは、野点風に設置された茶席だった。向かい合う様に両家の席があり、中央に客用の席がある。
その客用の席に雷達がいる。
ごくり……と、海は無意識に唾を飲み込んだ。
緊張した雰囲気がそこにあった。
「……」
深紅がこちらを見て、顔色を変えたのが判った。
「忍、そちらの方は？」
忍の母親が怪訝そうに忍に問い掛けた。
「母さん、紹介するよ。俺の恋人だ」
「なっ！！」
その場に居合わせている者達が絶句する。雷達は何食わぬ顔でいた。当たり前だけど。
「冗談でしょう？」

忍の母親は、青ざめた表情で彼を見詰めた。
しかし、忍は眉一つ動かさず。
「これが、冗談に見えますか？」
と、応えた。
「ふざけるな！！！」
低く野太い怒声が、響く。
「お前の為の婚約だぞ！！　火鷹のしきたりだぞ！！」
忍の父親が喚いた。
その声に一瞬、ビクリと海はしてしまう。
「俺の為？　こんなのが、俺の為ですか？」
冷ややかに、忍は笑った。
「俺の力の暴走を抑える『鞘』は、深紅になど勤まる筈が無い」
「そ、そんな事無いです！！」
ゆらりと、深紅が立ち上がって反論する。
「私は、貴方だけを想い、貴方の妻に相応しい力も手に入れたわ。どんな辛い修行にも耐えたのよ！！」
……ワタシガアノヒトニフサワシイ……アナタナドミトメナイ。
と、訴える瞳で深紅は、海を睨み付けた。
「フッ……くだらない」
忍は深紅を一瞥して、小さく笑う。
「あの程度で、俺に相応しいって？　滑稽だな。俺を止められるのは、この世でただ一人だけだ」
そう言うと、忍は海をそっと抱き締めた。
「こいつだけだ」
臆面も無く言ってのける忍に、海は嬉しくなってしまう。
「認めない……絶対に嫌！」
深紅が言う。
「貴方を諦める位なら……」
深紅は懐から、呪符を取り出し忍に向かって投げる。
「下がってろ、シア」

「うん……」
忍は海を背後に下がらせる。
「オン・サンザンサク・ソワカ！」
呪符は炎の矢の様になって飛んで来る。
すいっと、忍が手を翳すと矢は到達する前に見えない壁によって掻き消えた。
「はあああッ！！」
深紅が忍に向かって走って来る。その手には光る物が宿っていた。
「え！？　忍！！」
思わず、海は二人の間に立ってしまった。
鈍い音と、ちくりとするような、焼ける痛みが海の脇腹辺りを襲った。
「きゃあああああッ！！！」
ティアが悲鳴を上げる。
「あ、あ、あ……」
自分の仕出かした事に呆然となって、４、５歩後ろに後退するとぺたんと尻餅をついてしまう。
「つっ……」
つんのめって倒れそうになる海を、忍が抱き止める。
「シア……？」
「ごめん、ちょっとドジっちゃった。でも、大丈夫、かすり傷だから……」
笑う海を見詰める忍。
「……傷！　見せてっ！！」
ティアが一目散に、海に駆け寄って来る。
「ティア、治癒頼む」
海は忍から少し離れ、地面に膝をつく。
「無茶し過ぎよ、お兄様」
「ごめん」
傷口に手を翳して、ティアが呪文を唱える。

「大気に宿りし、水の精よ、我が願いに応えよ、彼者の傷を癒したまえ」
淡い青の光りが傷口に集まると、流れ出る血がゆっくりと確実に止まっていく。
「……」
海の傷口から流れた、赤い鮮血に濡れた手を忍は見て、目を見開いた。
「――――――っ！！！！！」
声にならない声で忍が叫んだ。
「何っ！？」
海は忍の方を見て絶句してしまう。
忍の足元から、緋色の炎がうねりながら繭を作る様に彼を取り囲んでいく。
炎の隙間から見える忍の髪は、緋色に染まっていた。
「……あれは……ラスの……」
呆然としながらも海は呟く。
「お兄様、忍様のあの姿は……」
紛れも無く、前世から受け継ぐ力を解放した姿だった。
「な……んで？」
唖然とする者達の中で、冷静に行動を起したのは忍の父親だった。
呪符を飛ばし、膨れ上がろうとする炎の繭を結界に閉じ込めたのだ。
「大丈夫？」
雷と翔が、海とティアに近寄って来て言った。
「立てるか？」
雷はすっと、手を海に差し伸べる。
「ああ、もう、傷は塞がってる」
その手を取り「よいしょ」と立ち上がった。
「ねえねえ、あれ、超マズイんじゃないの？」
翔がじーっと、炎の繭を眺めながら言う。

「マズイだけじゃあ、済まされないよ、ね？」
溜息混じりに雷が呟く。
「……様……私、怖い」
ティアが震える声で言った。
怖がるのも無理無い、畏怖さえひしひしと感じてくる程の圧倒的な『力』を目の前で見せ付けられているのだから……。
「取り敢えず、火鷹の人間がどう対処するのか見てみようか？　どうせ、海しか忍を元に戻せる事が出来ないんだし」
雷は冷静に告げた。
「俺……だけ？」
呟く海に、にこりと小さく笑って。
「でしょ？　水は炎を静められる。ま、それだけじゃないけどね」
と、答えた。
四人は騒然とする場に近付いた。
「何をやっている！　深紅は選ばれた者だぞ！！　あれを静めるのは『鞘』となる者の勤めだ！！」
怒鳴り散らす忍の祖父。
『……愚かな』
どこからとも無く声が響く。
忍の作った炎の繭から、朱色に揺れる別の炎が結界をすり抜けて人の形を成した。
「あ、あなた様は……」
先程まで、威厳の塊で怒鳴り散らしていた忍の祖父が膝を折って恭しく頭を下げた。
「焔様」
すると、海達以外の人達は忍の祖父と同じように膝を折って頭を下げる。
焔とは、忍が持つ『炎の剣』の精の事である。火鷹一族では奉り敬う存在であった。
十二単を纏った、物腰の穏やかな、でも、海、翔、雷、忍が持つ

剣の聖霊の四人の中で一番意志の強い瞳を持っていた。
焔の長い髪が、炎の中で揺れている。
『我が主の力を静めようとしても、無駄な事……』
「なにを……仰るのですか、焔様！？」
『あの力は、我と似て非なるもの……我が火鷹に与えた力とは違うもの。許されし者以外が触れれば、その身は灰も残さず消滅するであろう』
淡々と冷ややかに、その場に居る者総てに告げる焔はどこと無く怒っているように見えた。
『我に何も告げず、己等で『鞘』を選ぶから、このような事が起きるのだ』
「……」
しん……と、黙り込む火鷹一族の面々。
『……しかし……それよりも、今は主を正気に戻す方が先……か』
ゆっくりと、焔は海に近寄った。
『主の事……』
「いいよ、判っているから……ああなってしまったのは、自分のせいだから……あの時と同じ思いさせたから……」
海は首を振って、焔に言った。
シアーナが死んだ原因を思い出させた事、どんなにどんなに忍の心を傷つけていたのかと思うと、海は胸が締め付けられてならない。
もし、自分を庇って忍が傷付いてしまったら同じ様に壊れてしまうかもしれないと、海は思った。
「行くね……」
『……』
海の言葉に焔は頷いた。
（……ごめん、忍……今、助ける！）
すうっと深呼吸して、海は結界に触れる。
波打つ様に揺らめくと、海を難なく招く様にゆっくりと飲みこんで行く。

「これが、炎の中？」
ゆらゆらと揺らめく炎なのに、水の様に優しく、包み込む。
でも、どこか悲しい。
絶望感がひしひしと伝わってくるのが、海には判った。
「……」
ぎゅっと己の肩を抱き、海は前を見詰めた。
「あっ……」
海は、炎の先に忍を見付けた。
炎の十字柱に吊るされている忍の姿を……。
「忍！！」
手を伸ばし、海は駆け出していた。
「忍、忍っ！！」
忍の頬に触れる海の手が震えてる。
「……こんな風に自分を縛り付けなきゃならない位に、悔いているのか？」
忍の頬をそっとなぞる。
「バカ……俺は大丈夫なのに……」
知らず知らずの内に、海の瞳から涙が零れる。
「ごめん……忍……」
海はそっと忍の口唇に、口付けをする。
「起きろよ……なあ……」
ピクリとも動かない忍に、もう一度キスをする。
「……起きろってば！！」
「……」
ぴくん……と、忍の瞼が震える。
「……忍？」
「……ん……うる……さい」
「へ？」
忍の口から出た言葉に、海は一瞬呆けてしまう。
「……耳元で叫ぶな」

何時の間にか忍を括り付けていた柱は消え失せ、忍はうるさそうに解放された右手で耳を抑えている。
「叫ぶなって……言ったって、お前！　それが、助けに来た奴に言うセリフかっ！？」
「助けに……って……うわ……これは……」
忍は必死な形相の海と、周りの様子を見て絶句してしまう。
柱は消えたが、依然として炎の繭は健在であった。
「人に心配かけさせて、うるさいはないだろ！！　うるさいは！」
ドンドン！　と、忍の胸を叩く海の力は弱々しい。
「それに、炎竜王の力を解放するなんて……」
総てを浄化、消滅させるとも言われている炎の力。
使ったのは前世で一度きりだった。
黒竜王と戦った時に使い……美しい平原が焦土と変わった。
「……海……ごめんな」
ぎゅっと両手で、忍は海を強く抱き締めた。
「……ぅ……くっ……バカ……」
嗚咽を堪えながら、海は忍に抱き付いた。

愛しさと願いと

「炎の力よ、我が手に戻れ」
忍が右手を少し上げて開くと、渦を巻きながら炎は赤き輝きとなって掌の中へと次々に消えていく。
緩やかに世界が元に戻っていく……。
それと同じに、忍の髪も緋色から黒へと変わる。
「……」
総ての炎が消え去ると、結界だけが残った。
『主よ……』
焔が結界に手を翳して、一瞬の内にそれを消失させ忍の前に立つ。
「焔にも迷惑をかけたな」
忍はちょっと済まなそうに、焔に声を掛けた。
『いいえ……あの主に対して刃を向けた者の『力』は、剥奪しておきました』
首を振って、焔は言葉を綴った。
「そうか」
忍は深紅の事には敢えて触れず、焔の言葉を了承した。
「おーい！　忍――――っ！！」
ぶんぶんと、手を振り回しながら翔が駆けて来る。
それに続いて、ティアと雷もこちらへと来る。
「もう、大丈夫みたいだね」
雷はニッコリ笑って、忍に告げた。
「ああ」
忍は頷いて、雷に答える。
「……なあ……あれから、こっちってどうなったの？」
目をぱちくりさせて海が周囲を見渡すと、翔達以外は誰もいない状態だった。

「そうそう。焔があの女の力を無くしたじゃん。そしたら、もう用は無いとばかりに忍のじーさんが帰らせたんだ」
翔は少し複雑な表情をして言う。
「確かにさ、海にケガをさせたし、自業自得だろーけど……なーんかひでぇよなあー」
「だね」
小さく溜息を吐いて、雷は翔に相槌を打った。
「今までちやほやしてた連中だって、見向きもしないんだぜ？　勝手だよな。今まで担ぎ上げてたクセにさ……あー、やだやだ」
と、翔が気分悪そうに言った。
「……あいつらは、自分の保身と出世が大事だから、手駒にならない奴は即座に切り捨てる――――薄汚い連中だ」
忍は吐き捨てる様に言う。
「なあ……焔。あの子……これから、どうなるの？」
一歩間違えれば、自分だって同じ事をしているかもしれないと思ったら、この先、彼女の辿る道が少し気になって海は焔に問い掛けてみた。
『極普通の女の子として、幸せになりますよ。あの子の不幸は『力』を持ったせいですから……なにものにも縛られない未来が、あの子を受け入れるでしょう』
焔は優しく笑って言った。
「そっか……なら、良かった」
海は焔につられる様に、ほっとして微笑する。
『安心していただけたようですね。では、主……我はこれにて剣に戻ります』
忍に向き直り、焔は恭しく告げた。
「ああ。御苦労だったな」
『はい。では……』
焔は忍の言葉に頷くと、一陣の火となって風に溶ける様に消えた。
「さてと、これからどうする訳？」

雷は腕を組んで、忍に問い掛ける。
「どうもこうも無い。帰るに決まってるだろ。俺達の家にさ！」
ふっと笑って、忍が言った。
「わーい♪　やっと帰れる～～☆」
万歳と翔が大喜びする姿を見て、雷がクスクス笑う。
「では、さっさと用意をして帰りましょう。長居は無用ですわ」
それまで無言で様子を見ていたティアが、にっこりと微笑んで促す。
「そーだな。いい加減この姿と言うのもなんだし」
海が着物の袖を持ち上げぼやくと、忍は海の腕を引き寄せ。
「なんなら脱がしてやろうか？」
と、海の耳元で囁く。
「謹んで辞退させてもらいます」
海はキッパリと言ってから、はたと気がつく。
「……おい。この着物の弁償は、誰がしてくれるんだ？」
適当に持って来たとは言え、相当な金額なのは言うまでも無い。
「後で、俺がちゃんと請求してやるよ」
ポンポンと軽く海の頭を撫でる様に、忍は叩いて言った。
「本当だろうな？」
「ああ。本当だ」
「そんじゃ、帰り支度して玄関に集合だな！」
安心して笑い、海は皆に言う。
「ＯＫ♪　じゃ、俺、先に行くな！」
「あ、翔！　私も行きます！！」
元気に踵を返す翔を追い掛けるティア。それを笑顔で見詰める雷は、海達を見遣って。
「二人も早く用意した方が良いかもね。翔のあの調子じゃ、帰りにどこかに寄って行くって言い出すからね」
と、告げると手をヒラヒラさせて、雷は翔達が消えた方へと歩く。
「……俺達も行こう」

忍が優しく海に告げ、手を差し伸べた。
「……うん」
一瞬、戸惑った海だが、おずおずと忍の手の平に、己の手を重ねた。
そして、二人は同じ歩みで、進んで行くのだった。

こんな風にいられるのは滅多にない。
こんな風に手を差し出されて、嬉しいなんて。こんなに愛しく想う時が嬉しかった。
二人は互いに愛しさを胸に抱くのだった……。

夜空の花

海はロフトから、屋根に出られる窓を開けて外へと出た。
「よっと……」
キョロキョロと見回し、良い位置を探す。
「あの辺が良いかな？」
バランスを取りながら、海は屋根を歩く。
ドン！！
と、大きな音と身体に直接響く振動が来る。
「おっ！　始まった！」
海が顔を上げると、明るい光源がぱあっと花になって照らした。
今日は近所の神社のお祭り日である。
「……」
海は花火が見える良い位置に腰を下ろす。
光の花が開く度に、海はじっとそれを見詰めていた。
「海！　海！！」
「え？　うわっ！？」
海は隣に立って、自分を呼ぶ人物に驚く。
「し、忍！？」
「ったく、何度も呼ばせんなよな」
ちょっと不機嫌そうに言う忍の両手には、二つのペットボトルが握られていた。
「あ、ごめん」
謝る海の隣に座り込む。
「ほら、飲むだろ？　コーラ」
忍は海にペットボトルを突き出す。
「ああ、サンキュ」
受け取ると、にっこりと海は笑う。

「……」
すっ……と、忍の顔が海の顔に近付く。
「ん……」
口唇がそっと重なり合う。
「好きだぜ、海」
「……俺も」
照れ臭そうに笑いながら、海は言った。
「なあ、忍」
「ん？」
「あれから、実家の方のゴタゴタは解決した？」
恐々と海は忍に問い掛けてみる。
「ああ。もう、大丈夫だよ。迷惑を掛けたな」
その言葉を聞き、海は少し複雑な表情をして頷いた。
「あ、うん」
「どうかしたか？」
「……ん、何でもない」
首を横に振る海に、忍は少し不機嫌になりながら言う。
「なんだよ、気になるだろ」
「……だって」
「言えよ」
「……本当に、あれで良かったのかなって思ってさ」
曇った表情の海は、どこと無く後悔している風にも見えなくない。
「海」
手を伸ばして忍は海の髪に指を絡ませて、そっと海を自分の肩あたりに引き寄せる。
「お前が気に病む必要なんかない。悪いのは俺だ」
「でも……」
「いいんだよ、あれで。俺にとっても『火鷹』にとっても」
肩に頬を寄せながら、海は不思議に思う。
「火鷹にとって？」

「ああ、俺の力は『異端』だからな」
「異端って……あ……」
言葉にして、思い当たる事に気付く。
「炎竜王の力……！？」
「あの力を持っている俺が、火鷹の後継者なんて出来るわけがない。そうでなくても、俺に『火鷹』は重過ぎる。背負うものは少なくていい……お前が傍にいること……俺にとって、それだけが総てだから」
どことなく切ない声のトーンに、海は悲しき過去を思い出す。
背負う物が、沢山あった忍。
それを総て失った。ただ一人の為に……シアーナの為に。
「……うん」
何かが込み上げてくる感覚に、海は胸が苦しくなる。
「海」
「ん？」
呼ばれて顔を上げる海は、忍の瞳と向き合う。
「愛してる。ずっと、傍にいろよな」
「……うん。傍にいる」
そう言って海は、笑顔を忍に見せる。
「愛してるよ……海」
忍は海の唇に、優しいキスをする。
「俺も、愛してる。」
海はそう答えて、瞼を閉じた。想いを委ねて――――――。

二人を祝うように、夜空に大輪の花が咲くのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5611s/

Ｆｅｅｌｉｎ’Ａｌｏｎｅ

2011年4月18日20時40分発行